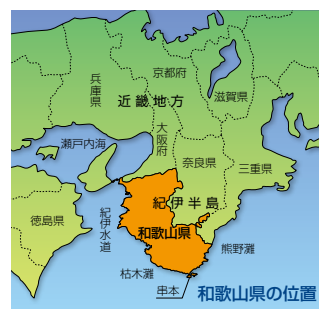


第2章 わかやまの生物



わかやまの海と生きもの



魚類・貝類の多い3種類の海

日本全国の海からは4,000種近くの魚類が見つっています。和歌山県沿岸^{えんがん}では、その半分近くの約1,700種の魚類が見つっています。北海道沿岸^{ほっかいどう}の約750種、高知県沿岸^{こうち}の約1,400種、瀬戸内海全体^{せとないかい}の約650種と比べると、県内にはずいぶん多くの魚類のすんでいることがわかります。

また貝類も、全国の約6,000種のうちの3,500種くらいが県内で見つっています。熱帯地方^{ねったい}のサンゴ礁^{しょうご}を作るイシサンゴ類は、日本産約400種中の100種以上が見つっています。和歌山県の沿岸は、海洋生物の種類数が日本でも特に多い地域として知られています。

海岸線の長さは約580kmありますが、これは、全国では第19位なので、海岸線が特に長いわけではありません。県内の海にたくさんの生物がすんでいる理由は、紀伊水道^{かききなだ}・枯木灘^{くまの}・熊野灘という性質の異なる3種類の海があることと、自然の海岸がたくさん残されているからです。

紀伊水道

日ノ御崎^{みさき}から和歌山市にかけての海岸は、紀伊水道に面しています。紀伊水道は、平均水深が50mより浅くて、冬には水温が10℃以下になり、瀬戸内海とよく似た性質の海です。太陽の光が海底まで届くので、マクサ（テングサ）やワカメのような海藻類^{かいそうるい}の生育^{せいいく}に適しています。砂地の浅い海底には、海草^{うみくさ}の一種であるアマモの生えているところもあります。

海藻やアマモは、小さなゴカイやヨコエビなどのすみかになっていて、これらをエサにする魚の子ども（稚魚^{ちぎよ}）の育つ海です。紀伊水道には、マダイやカレイ、クルマエビなどの瀬戸内海にも多い生物がたくさんすんでいます。

枯木灘と田辺湾

串本町^{くしもと}の潮岬^{しおみさき}から白浜町にかけての枯木灘^{くろしお}は、黒潮が本州に最も近づく海です。黒潮は、水温20～25℃の透明できれいな海水の流れです。きれいな分だけ栄養分は少ないのですが、栄養分の多い沿岸の海水と混ざり合うと、暖かくて栄養分^{ほうふ}の豊富な、すみ心地のよい海となります。

また黒潮は、熱帯の海にすむ生物を運んできます。枯木灘の海の中の環境は、紀伊半島よりずっと南の海と似ているため、イシサンゴの仲間が数多くすみつき、サンゴ礁^{しょうご}にいる魚類や熱帯性の貝やウニなどもたくさんすんでいます。田辺湾^{たなべわん}から日ノ御崎にかけての沿岸も黒潮の影響を強く受けて、温帯性^{おんたい}の生物に混じって熱帯性の生物もすんでいます。

*1 海藻は、キノコと同じように胞子で繁殖するなかま。
*2 海草は、陸上の植物と同類で、花を咲かせ、種子で繁殖するなかま。

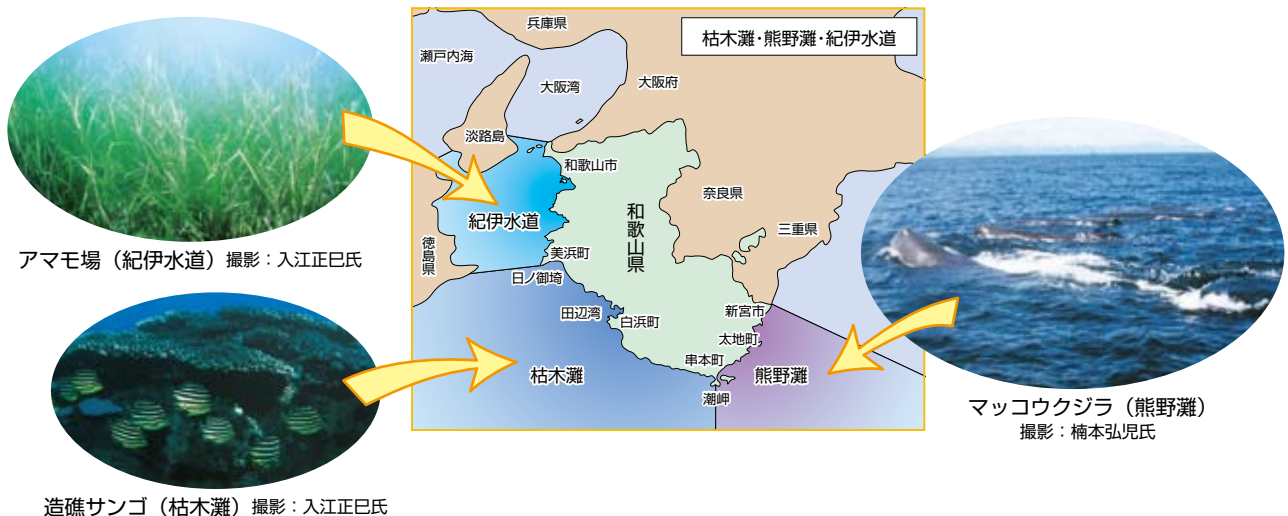
熊野灘

潮岬から新宮市にかけての熊野灘は、海底が急に深くなっていて、その沖は水深2,000mを越す深海に続いています。そのため熊野灘からは、チョウチンアンコウやタカアシガニのような深海の生物がたくさん発見されています。

また、深海には栄養分の多い海水がたまっています。沖を流れる黒潮が、この栄養分の多い深海水を表面にまで巻き上げているので、熊野灘は、魚のエサになるプランクトンも多い海です。熊野灘に突き出た太地町の沿岸には、全長15m前後もあるマッコウクジラやザトウクジラが毎年何十頭も現れます。鯨にとって熊野灘は、太平洋を東に向かう前にエサを十分にとって休けいする海なのです。今から100年くらい前までは、全長20mにもなるシロナガスクジラも泳いでいました。

海をきれいにする海岸の生物

波打ち際が自然の岩や砂浜の海岸を、自然海岸といいます。反対に、堤防や岸壁に波が直接当たるところは人工海岸です。和歌山県では、全海岸線の約70%が自然海岸です。また、海には、フジツボ類やマガキのように、岩にくっついていて生物がたくさんいます。くぼみや出っ張りの多い自然の磯には、まっすぐに切り立った人工の岸壁より何十倍も多く生物がすんでいます。これらの生物は、海水に漂っているプランクトンや生物が分解した小さなごみ粒などをエサにしています。一方砂浜では、打ち寄せる波が砂にしみこんで、海水をろ過する働きも行っています。自然海岸では、生物と海岸の両方が、海水を浄化する役割を果たしているのです。



わかやまの知識

コライ

【ラムサール条約と串本のサンゴ】

ラムサール条約とは、1971（昭和46）年にイランのラムサールで採択された「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」のことで、最初は、湿原や干潟の国際的な保護を目的としていましたが、その後水深6mより浅い海も保護の対象に含めるようになりました。串本の沿岸は、温帯地域にありながらサンゴ礁を造る熱帯性のサンゴが多数生息している世界でも貴重な海であることから、「非サンゴ礁域のサンゴ群集」として、2005（平成17）年に登録されました。

第2章 わかやまの生物



わかやまの名をもつ植物



和歌山県は、^{おんだん}温暖で雨量が多いために、植物がよく生育し、^こ緑濃い森林が広がっています。日本には約7,000種類の植物が知られ、そのうち約2,500種が和歌山県にあります。^{ひょうこう}標高が高い山にはブナやミズナラなどの落葉樹が広がり、海岸近くの森にはウバメガシやヤマモモなどの常緑樹が茂ります。また、温暖な^{この}気候を好むリュウビンタイという大型のシダ植物もみられます。

こうした野山にみられる植物には、和歌山の地名に^{ちな}因んで名前がつけられた植物や、その土地で生活する人たちの役に立っている植物がたくさんあります。

高野山の植物

高野山の人々は、^{むかし}昔から^{むだん}無断で切ってはいけない木を「^{こうやろくぼく}高野六木」と定め、大切に^{*1}してきました。コウヤマキはそのうちのひとつで、切らずに守られてきた森は、今では^{りっぽ}立派な^{じゅりん}純林になっています。コウヤマキの材木は水に強いのでお風呂を作る材料として使われます。また、枝は^{ほとけ}仏さまに^{そな}供えられます。



コウヤマキ (高野町)

コウヤボウキは、高さ50～80cmの^{しょうてい}小低^{ぼく}木で、県内の明るい^{ぞうきばやし}雑木林などに^{ふつう}普通にみられます。秋になると^{えださき}枝先に花を咲かせ、冬には^{らくよう}落葉します。高野山の寺では、この木の枝を集めて、^{たば}束にしてほうきをつくりました。そこからコウヤボウキという名がつけられています。



コウヤボウキ (和歌山市)

高野山は^{しんこう}信仰の^{せいち}聖地であるとともに、野生植物の^{ほうこ}宝庫としても知られており、昔から多くの研究者が足を運び、植物の種類が調べられてきました。高野山で最初に発見された植物の中には、コウヤワラビ、コウヤカンアオイ、コウヤハリスゲなど、高野山にちなんだ名をもつ植物がたくさんあります。

*1 高野山で昔から材木などに利用してきたスギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガ、アカマツの6種類の樹木。
*2 ある一種類の樹木だけが、ほかの種類よりも際立ってよく成長している林。

熊野の植物

紀伊半島の南部，県内のおもに東牟婁郡，西牟婁郡にあたる地域は，昔から「熊野」と呼ばれています。険しい山や切り立った谷が多く，そこには貴重な植物が生き残っています。

キイジョウロウホトトギスは，紀伊半島の固有の植物で，ユリのなかまの多年草です。奥深い山の崖に垂れ下がり，秋に黄色い花を咲かせます。花の美しさから園芸用に採られてしまったり，生えていた崖が道路工事などでつぶされてしまうことが原因で，数が減っています。

熊野地方に生育する植物で，「紀伊・紀州・紀の国」の名がつけられた植物には，キイセンニンソウ，キイトラッキョウ，キノクニスズカケなどがあります。

他に，熊野の名がついた植物に，クマノミズキ，クマノギクがあります。



キイジョウロウホトトギス（那智勝浦町）



【紀州の植物研究家，小川由一先生】

1889（明治22）年，現在の岩出市に生まれた小川由一氏は，和歌山高等女学校，和歌山信愛女子短期大学において教壇に立つかわら，和歌山県内をくまなく歩いて植物採集に取り組みました。特に，高野山の植物について詳しく調査を行い，その成果は「高野山の植物」「紀伊高野山植物誌」といった名著にまとめられています。晩年には，伐採の危機にあった摩尼山天然林の保護を強く訴えました。

小川氏の業績を代表する植物に，カツラギスミレ (*Viola* × *ogawae*)，ヒノミサキギク (*Chrysanthemum* × *ogawae*)，キイシモツケ (*Spiraea nipponica* var. *ogawae*) があります。それぞれの和名に和歌山の地名が，学名に小川氏の名前が残されており，今もなお後進の人々に語り継がれています。



カツラギスミレ（田辺市龍神村）



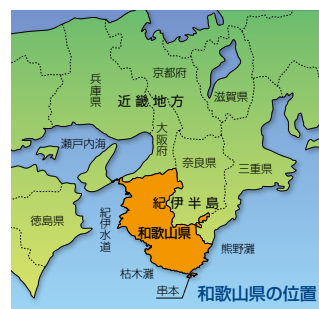
ヒノミサキギク（美浜町）

* 1 摩尼山は，高野山奥の院を囲む高野三山のひとつ。

第2章 わかやまの生物



わかやまの名をもつ動物



本州 最南端の和歌山県は、半島という地理的環境と暖流の影響を受け、さまざまな動物を育ててきました。現在、和歌山県には約7,000種類の昆虫が分布していることが確認されていますが、もっと調査が進めば、10,000種類を超す昆虫が発見されると言われています。

このように、たくさんの動物がすんでいる和歌山県には、本県にしかない種類や県内の地名に因んだ名前をもつ動物もいます。

ワカヤマヤチネズミとワカヤマムササビ

どちらも和歌山の名前を持った哺乳動物です。ワカヤマヤチネズミは、県南部の山地に生息するネズミで、東北地方に分布するトウホクヤチネズミに近縁の種類です。本州の北と南の端に離れて近縁の種類が分布する、非常に珍しい種類です。

ワカヤマムササビは、近畿地方に生息するムササビのグループに付けられた亜種名（種名よりも小さい分類単位）です。他の地域のムササビよりも体色が濃いということで分けられましたが、個体により変化が見られ、他地域の個体と見分けられないこともあります。

和歌山県にちなんだ昆虫

昆虫の名前（標準和名）には、最初に発見された地名を付けることがよくあります。とくにその地域でしか見られない種類については、その地名を付けた方が昆虫の特徴をよく表すので、種名に地名の付く昆虫は多く見られます。県内は、古くから高野山や那智山など有名な採集地がいくつかあり、多くの研究者が訪れているので、和歌山県の地名に因んだ昆虫もたくさん発見されています。

キエアバタコバネハネカクシやナンキナガゴミムシ、キイフトヒラタコメツキ、キエアカコメツキ、キイホソヒラタコメツキ、キイチビマメコメツキ、キイクビボソジョウカイ、キイチビヒョウタンゾウムシなど紀伊半島にちなんだ名前の昆虫もあり、これらも紀伊半島及びその周辺にしか分布しない種類です。このほかに、ナンキウラナミアカシジミやナンキコブヤハズカミキリ、キイオサムシなどのように紀伊半島南部で特化した亜種にも地域名が付けられることもあります。

和歌山各地の地名にちなんだ昆虫

チビゴミムシのなかまは、地中生活をしている目の退化したゴミムシで、移動力が小さいため地域別に違った種類に分化しています。特に和歌山県では、このなかまの研究が進んでいて、コカシメナシチビゴミムシ（すさみ町コカシ峠）、クマノメナシチビゴミムシ（新宮市熊野川町）、カワベメナシチビゴミムシ（日高川町かわべ）、オウトウメナシチビゴミムシ（大塔山系）、リュウジンメナシチビゴミムシ（田辺市龍神村）、カダメナシチビゴミムシ（和歌山市加太）、ミサトメナシチビゴミムシ（紀美野町旧美里町）な

ど多くの種類が分布していることが知られています。

また落ち葉の下や地中生活をするコバナナガハネカクシのなかまも、和歌山県では多くの種に分化していることが分かり、スサミコバナナガハネカクシ、コウヤコバナナガハネカクシ、ゴマダンコバナナガハネカクシ、オオトウヒメコバナナガハネカクシ、ナンキコバナナガハネカクシなど、県内の地名をもつ種がたくさん発見されています。

ヒゲボソゾウムシのなかまは、日本から24種類が知られていますが、限られた地域にしか分布しない種が多く、特に紀伊半島で著しく種分化しています。紀伊半島には24種中13種が分布していて、うち7種が紀伊半島にしかない種です。和歌山県には7種のうち5種が分布していて、ゴマダンヒゲボソゾウムシ、ゴマダンコブヒゲボソゾウムシという護摩壇山にちなんだ名前が付けられています。

これらのほかにも、限られた地域にしか分布しない種にその地域の地名がついた種がいくつかあり、コウヤササキリモドキやシラハマナガゴミムシ、オオトウカギバラヒゲナガゾウムシ、タキモトクビボソジョウカイ（新宮市熊野川町瀧本）、ナチセスジゲンゴロウなどが知られています。

コウヤホソハナカミキリは全国各地に広く分布し、普通に見られるカミキリムシですが、高野山で最初に発見されたために、コウヤという地名を種名に付けられました。ナチアオシャチホコやナチグロコナジラミ、ナチコノハカイガラムシなども、各地に分布している昆虫ですが、那智山で最初に発見されたために、ナチという名が付いています。他にもミサトザイノキクイムシやオオトウザイノキクイムシ、ワカヤマザイノキクイムシ、コウヤケアブラムシなども県内で最初に発見されたので、和歌山の地名をいただいた昆虫です。



ミサトメナシチビゴミムシ



スサミコバナナガハネカクシ



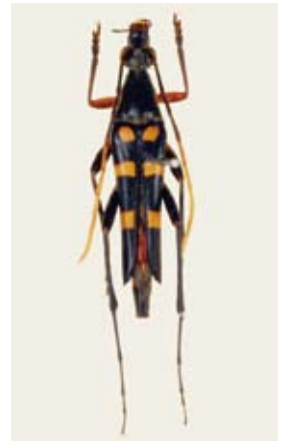
ゴマダンヒゲボソゾウムシ



オオトウカギバラヒゲナガゾウムシ



ナチセスジゲンゴロウ



コウヤホソハナカミキリ



わかやまの知識



そはやきちいき
【蘇速紀地域】

植物の分布区分を表す用語のひとつで、1931（昭和6）年に京都大学の小泉源一博士が提唱しました。西から蘇の国（南九州の古名）、速吸瀬戸（豊予海峡）、紀伊の国（和歌山県と三重県の南部）の三つの文字を組み合わせて出来た言葉です。この地域は中央構造線よりも南で、約1,700万年前の第三紀中新世以降海没していない歴史を反映して、中国大陸西南部と関連のある起源の古い植物や、この地で分化した固有種が多いことが知られています。また、このような植物の分布は動物にも反映し、多くの特徴的な動物を育てています。

第2章 わかやまの生物



将来に伝えたい生きもの

●天然記念物

日本に昔から伝わる大切な建物や美術工芸品・伝統技能などを保存するための法律として、「文化財保護法」があります。この法律では、「学術上貴重で、わが国の自然を記念する」天然物や天然現象を天然記念物として指定することが定められています。天然記念物には、日本にしかない貴重な動物や植物とそれらの生息地、繁殖地などが指定されていますが、珍しいだけでなく、それぞれの地域の生活や文化と密接に結びついていることも特徴です。

那智原始林（那智勝浦町／国指定天然記念物）

日本一の落差で知られる那智の滝周辺には、熊野那智大社の神域として大切に守られてきた照葉樹の森が広がっています。シイノキ、イチイガシ、イスノキなどの大木がみられ、昔から変わらない原生林の姿をとどめています。



那智原始林（那智勝浦町）

南方系のシダ植物の豊富さでも知られており、全国各地からシダを研究する人がこの地を訪れます。明治以降、本格的な生き物の調査が行われ、ナチシダやナチマイマイといった那智山周辺で発見された動植物に、那智の名が付けられています。

那智勝浦町の那智原始林は、1928（昭和3）年に国の天然記念物に指定されました。



ナチシダ（那智勝浦町）



ナチマイマイ

キイシモツケ群生地（紀の川市龍門山／県指定天然記念物）

和歌山県でしかみられない固有の植物は6種類あり、その1つがキイシモツケです。キイシモツケはバラの仲間の落葉低木で、枝いっぱいえだに白い花を咲かせます。紀ノ川の南端なんたんにそびえる龍門山（紀の川市）の群生地は有名です。花の見ごろは6月上旬で、山頂近くりゅうもんざんの登山道が白い花でうめつくされます。1973年、この群生地は和歌山県の天然記念物に指定され、大切に守られています。



キイシモツケ（紀の川市）

ユノミネシダ自生地（本宮町／国指定天然記念物）

熊野古道の山あいにある日本最古の湯の峰温泉。そこに世界の熱帯から亜熱帯にかけて生育する常緑性のシダがあります。和歌山にゆかりの地名をもつシダの一つでユノミネシダといいます。

1877（明治10）年に那智山のふもとの鉾山で最初に発見されましたが、2番目に見つかった湯の峰の名前が付けられています。

葉は大型で長さが2mにもなり、表面は鮮やかな緑色をし、裏面は白色をしています。葉の伸び方に特徴があり、新しく生えた葉は、1対の羽片がある程度伸びるまで、先の部分は伸びるのを一時やめます。一度見たら忘れられない姿・形をしています。本宮町のユノミネシダ自生地は、1928年に国の天然記念物に指定されました。



ユノミネシダ（田辺市本宮町）

オオウナギ生息地（富田川／国指定天然記念物）



オオウナギ（県立自然博物館）

オオウナギは最大で2m以上になる大型のウナギです。富田川流域は分布の北限近くにあたり、学術的に貴重であるため1923（大正12）年に白浜町の三ツ石の淵、濁淵、墓岩の3か所が国の天然記念物に指定されました。その後、追加指定がなされ現在では旧中辺路町と旧大塔村の境界から河口までの約18kmが「オオウナギ生息地」として保護されています。以前は大型の

オオウナギが生息していたようですが、近年は小型の個体が時おり確認される程度です。オオウナギは河川の生態系の頂点に立つ動物のため、生息にはさまざまな生物がすむことのできる河川が必要です。オオウナギがたくさんすめるような豊かな河川をいつまでも残していきたいものです。

*1 キイシモツケと、キナンカンアオイ、キイウマノミツバ、オオママコナ、キノクニスズカケ、クルマギクの6種。

ウミガメの上陸する浜 (みなべ町千里浜／県指定名勝・天然記念物)



アカウミガメの上陸 (みなべ町)

アカウミガメは、甲羅の長さが1 m近くにもなる大型のウミガメです。北太平洋にすむアカウミガメは、日本列島の外洋に面した砂浜で産卵し、生まれた子ガメが2～3年もかけてアメリカ大陸西海岸にたどり着きます。その後、20年ほどしておとなになったウミガメが、再び日本の海岸に戻って来て産卵するのです。県内には、みなべ町の千里浜、串本町の上浦海岸と橋杭海岸や、新宮市の王子ヶ浜、田辺市の扇ヶ浜などのアカウミガ

メの産卵地が知られています。その中でも千里浜は、長くて大きな砂浜があることから、1964（昭和37）年に県の名勝・天然記念物に指定されました。ウミガメの産卵調査と保護活動を20年以上にわたって行っている「みなべウミガメ研究班」の記録では、1991（平成3）年の延べ上陸頭数は786頭、産卵頭数は348頭もありましたが、その後は次第に少なくなり、1997年には産卵頭数が56頭にまで減少していました。ところが2008年には、延べ産卵頭数が269回も観察されて、保護活動を行ってきた人々も喜んでいきます。

ウミネコが繁殖する島 (美浜町弁天島／県指定天然記念物)

ウミネコは、昔から漁をする人たちにとって、魚群を知らせてくれる大切な鳥です。毎年12月になると、美浜町弁天島には約200羽のウミネコがやってきます。この鳥は、初夏、険しい崖のすき間を利用してひなを育てます。そして7月末には、島を去っていくのです。弁天島は、1958年にウミネコとウミネコの繁殖地として県指定天然記念物に指定されました。

由良町白崎にも毎年600羽くらいのウミネコが産卵のために訪れます。

近ごろは、海の汚染や釣り糸・釣り針などで命を落とすウミネコが増えてきています。



抱卵するウミネコ (由良町)



【動物の種まき】

ヤマザクラやヤマモモの木の下には、毎年たくさんの種が落ちるのに、なぜか、そこではなかなか芽が出ません。ところが、それらの種をよそへ持って行ってまくと、よく芽が出るのです。

ヤマモモやサクラだけではありません。野生の多くの植物は、このような性質をもっています。ですから、植物が子孫を増やして、生き続けていくためには、種の運び屋さんが必要なわけです。

リスやカケスの忘れもの

リスは木の実などを遠くへ運んでいって、落ち葉の下などに隠しておく習性があります。隠された木の実が置き忘れられて芽生えることが多いのです。カケスやヤマガラも、どんぐりなどをあちこちへ運んでいきます。そして、土の中に隠すこともあり、枝の上で食べようとして取り落とすこともあります。つまり、種まきをしているわけです。

糞の中には種がどっさり

山道を歩いてみると、獣の糞が案外たくさん落ちていたものです。そして、それらの糞の中にはたくさんの植物の種が入っています。ニホンザルの糞の中には、野生のイチゴ類のような小さな種が無数に入っています。テンの糞にも、コウゾ・ヤマモモ・ヒサカキ・スイカズラなど、数え上げればきりが無いほど、多くの植物の種が入っています。なかには、たいへんおもしろい特殊な種まきをする鳥もいます。それはヤドリギの実を食べるヒレンジャクとキレンジャクです。ヤドリギは大きな木に寄生する植物ですから、高い枝の上に種が運ばれなければなりません。レンジャクはヤドリギの実を一度にたくさん食べて、腹がいっぱいになると、



木の実をくわえたカケス（有田川町） 撮影：前田玄津二氏



テンの糞から出てきたもの（海南市） 撮影：前田玄津二氏

そして、そこでゆっくりと糞を出します。ヤドリギの実には特別なしかけがあって、レンジャクの糞は、長くてねばり糸になって出るようになっています。だから、この糸にぶら下がって出るヤドリギの種子は、木の枝によくひっかかるのです。うまい仕組みになっているのに驚きます。

このほかに、鳥や獣の腹をくぐらない別の方法で、よそへ運ばれていく種もあります。どのようなしかけをもった種が、どんな鳥や獣に運ばれているか、想像したり、観察したりしてみてください。



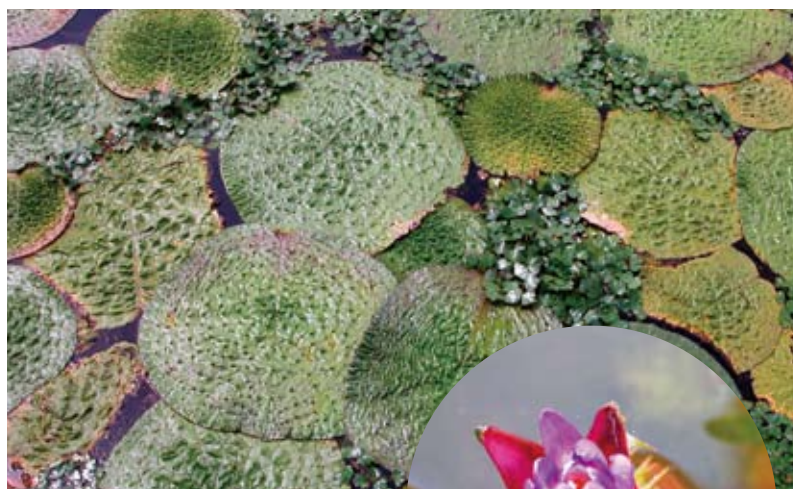
ヒレンジャクの脱糞～糸になってぶら下がる～（紀美野町）
撮影：前田玄津二氏

●レッドデータブックの生きもの

1966（昭和41）年に国際自然保護連合が、世界的な規模で絶滅のおそれのある野生生物を選び、それらの生息に関する情報をまとめた本を出版しました。絶滅の赤（レッド）信号のともった生物の情報（データ）をまとめた本ということで、レッドデータブックと呼ばれています。その後、野生生物の保護を進める上での基礎的な情報誌として、国ごとや地域ごとのレッドデータブックが発行されるようになり、和歌山県では2001（平成13）年に発行されました。絶滅危惧Ⅰ類やⅡ類に選ばれた生物は、特に絶滅の危険性の高い種類です。

オニバス（和歌山県：絶滅危惧Ⅰ類；環境省：絶滅危惧Ⅱ類）

オニバスは、池や湖沼に生えて時には2mあまりの大きな葉を水面に浮かべます。一年草で葉に鋭いトゲがあります。水面で花を咲かせる開放花と、水中で果実をつける閉鎖花の2種類の花をもっています。またハスとちがって蓮根は作りません。種子は一度に発芽するのでなく周囲の環境に応じて何年か経ってから発芽するものもあり、環境変化への対応をして子孫の維持をはかっています。



オニバス（紀の川市）

池の改修や水質汚染などの影響で全国的にも激減しています。県内では紀北地方で生育が知られていましたが、最近紀南地方でも確認されています。



オニバスの花

タチバナ（和歌山県：絶滅危惧Ⅰ類；環境省：絶滅危惧Ⅱ類）

ミカンの野生種にタチバナという種類があります。静岡県以西の本州と、四国・九州の海岸に近い山に



タチバナ（海南市下津町）

生えていますが、県内では白浜町とみなべ町の2箇所にごくわずかに見られるだけで、絶滅の危機にさらされています。樹木の姿は栽培種のミカンに似ていますが、葉は長さ5cmと短く、果実は小さく直径が3cmで、形はひしゃげた円形をしています。

この樹木は、古事記に「ときじくのかくのこのみ」として名が出ており、万葉集には69首も詠われています。古くからの歴史とロマンに満ちた和歌山の宝として大切にしていきたいものです。

ワカウラツボ (和歌山県：絶滅危惧 I 類)

ワカウラツボは、5mm程の大きさで、茶色または白色の^{まきがい}巻貝です。初めて採集されたのは、1933年のことで、和歌山市^{みかづら}三葛の和歌川で見つかりました。新種^{しんしゅ}として正式に発表されたのは、それから21年後の1954年のことです。和名には和歌浦^{わ か う ら}の地名がついていて、学名の*Iravadia* (*Fairbankia*) *sakaguchii*には、和歌山^{し は ん}師範学校（現在の和歌山大学教育学部）教員で、和歌山県の自然について多くの新発見をした坂口^{さかい}総一郎^{そういちろう}氏の名前が付けられています。新発見以来ずっと見つからなくて、^{まぼろし}幻の貝と呼ばれていましたが、66年後の1999年、和歌浦の近くで再発見されました。最近では、和歌山市と広川町でも見つかっています。



ワカウラツボ (和歌山市)



わかやまの知識



【食べ物を包む葉】

和歌山市から新宮市にかけての海岸や川岸に、イネのなかまのダンチク（アセ）が生えています。子どもたちは茎で笛を作ったり、葉でササ^{ふね}舟を作って遊びます。秋、穂^ほを出し生長した広い葉を使い、^{あぶら}脂が載ったサバを使った「すし」を^{つつ}包んで「なれすし」を作ります。ダンチクの^{かお}香りが、ほのかに「すし」に移り、おいしい保存食となります。

有田市から日高町では^{たいふう}台風などでダンチクの葉が破れたときにはクマタケランの葉を使います。有田郡や日高郡の^{おくち}奥地ではダンチクの葉の代わりにバショウやハランの広い葉を使い、紀北地方ではカキやワサビの葉でサバすしを包んだ「カキの葉すし」や「ワサビすし」があり、それぞれ風味があります。

紀南地方では、おにぎりをタカナの^{つけもの}漬物の葉でくるんだ「めはりすし」が作られています。適度な塩味にタカナの^{かお}香りが加わり、おかずなしでもおいしく食べられます。また、^{くしもとちよう}串本町周辺では、ホウロクイチゴの葉をおけに敷き、この上に味付けしたご飯・魚・ご飯・魚と交互に置いた「イチゴすし」など、地方色豊かな食べ物も作られています。

「かしわもち」は葉でもちを包みます。和歌山県にはカシワの木があり



サルトリイバラ (日高町西山)



ダンチク (日高町阿尾)



アセで巻いたなれすし

ませんのでサルトリイバラの丸い葉であんこを入れたもちをはさみます。サルトリイバラを「かしわもちの葉」とか「イビツ」・「サンキライ」とよんでいる地域もあります。

「サクラもち」や「チマキ」はサクラやヨシの葉を利用したものです。これらは季節の香りと味がします。このように植物の葉は人々の生活と深い^{ちえ}かかわりがあり、生活の知恵を知ることができます。

ルイスツノヒョウタンクワガタ (和歌山県：絶滅危惧Ⅱ類)

おもに琉球列島に分布するクワガタムシで、琉球列島以外では九州南端部と和歌山県那智勝浦町にしか生息していません。海岸林のシイやサクラなどの朽ち木内で幼虫・成虫共に生活していて、外にはあまり出てきませんが、生息地では一年中成虫が見られます。

本州では、那智勝浦町のごく限られた海岸林にしか生息していないことから、生息地の破壊が種の全滅につながるため、和歌山県は絶滅危惧種に指定しています。



ルイスツノヒョウタンクワガタ

トラハナムグリ (和歌山県：絶滅危惧Ⅰ類)

北海道から九州まで分布しているコガネムシですが、北方系の種類なので、関東以西では1,000m以上の標高の高い山に生息しています。県内では、1950年代には護摩壇山や高野山などの1,000m級の山地に少なからず見られたようですが、現在では大塔山系と那智山系周辺でしか見られなくなり、個体数も少ないようです。また、新宮市では熊野川の河原のような海岸に近い低地にも生息しており、本種の分布を知る上で興味深い地域です。



トラハナムグリ

ナガレホトケドジョウ (和歌山県：絶滅危惧Ⅱ類；環境省：絶滅危惧Ⅰ類)

有田川、広川、由良川、日高川、切目川、日置川、熊野川の山間の浅くて流れの緩やかな細流に生息している全長7cmのドジョウのなかまです。とくに広葉樹林の中で、他の魚が生息しないような水量の少ない沢に多くみられます。



ナガレホトケドジョウ

山間部の、森林伐採、道路工事、堰堤建設などにより、生息地が消失したり生息環境が悪化しています。

オオダイガハラサンショウウオ (和歌山県：絶滅危惧Ⅱ類；環境省：絶滅危惧Ⅱ類)

オオダイガハラサンショウウオは、奈良県大台ヶ原山で見つかった日本の固有種で、紀伊半島にのみ生息しています。

和歌山県では、橋本市雪池山(橋本市)、かつらぎ町旧花園村白口峰、田辺市の護摩壇山、水上学術保護林、果無山脈、笠塔山、黒蔵谷、白浜町将軍山、古座川町大森山、新宮市白見山などの山間部に残る自然林内に生息していますが、いずれの場所でも、自然林が非常に少なくなっていて、かろうじて生き残っています。



オオダイガハラサンショウウオ (田辺市本宮町黒蔵谷)

成体（全長18cm）は林内の地面で土壌中の小動物を食べ、溪流の源流部（アマゴのすむさらに上流部）で3月頃に産卵します。幼生は1年を通じて源流部にすみ、水生昆虫などを食べて成長し、翌年の春から夏にかけて陸上生活に移ります。奈良県と三重県では県指定天然記念物となっています。

ハコネサンショウウオ（和歌山県：絶滅危惧Ⅰ類）

ハコネサンショウウオは、本州、四国の山間の溪流に生息していますが、和歌山県での生息地はきわめて少なく、田辺市の果無山脈と三日森山、新宮市白見山などの溪流周辺のごく一部に限られています。かつては広い範囲に生息していたものと思われませんが、山間部の自然林の減少により溪流の流水環境が変化して、生息地も減少したものと思われま



ハコネサンショウウオ（新宮市田長谷）

本種は、サンショウウオ類の中でも特に肺のない両生類として知られ、また、成体の体色は関東地方と関西地方とではかなり異なり、県内のものは写真のように鮮やかな朱色の斑紋があります。

成体（全長約16cm）は自然林内の溪流周辺の湿潤な環境にすんでいます。その成体を見つけることは大変困難です。春（4～5月）に産卵し、幼生は2年間（あるいは、それ以上）溪流で水生昆虫などを食べて成長します。

アカショウビン（和歌山県：絶滅危惧Ⅰ類）

和歌山県の山林の特徴は、山と谷の入り組んだ険しい地形の溪谷と、さまざまな種類の常緑広葉樹が入り交じって生える照葉樹林です。このような、保水力の豊かな深い森林を流れる豊富な水量の溪流沿いに、5月、はるか東南アジアから、カワセミのなかまで深紅の大きな嘴をもつ美しいアカショウビンが渡ってきます。



アカショウビン 撮影：有本 智氏

以前は、主な河川の上流部で普通に見ることができましたが、植林で人工林が増えたり、河川改修の影響などにより、激減しているのはとても残念なことです。

ウチャマセンニュー（和歌山県：絶滅危惧Ⅱ類；環境省：絶滅危惧Ⅱ類）

和歌山県の海岸の特徴は、枯木灘海岸に代表されるような複雑に入り組んだ海岸のあることです。そのような県南部の海岸や島で見かける林内の明るい林に、5月、ウグイスのなかまのウチャマセンニューが渡ってきます。



ウチャマセンニュー 撮影：有本 智氏

本種の渡来が確認されているのは、和歌山県では新宮市孔島、みなべ町鹿島などの6カ所に限られています。ウチャマセンニューは、森林が高木に覆われておらず、低木がまばらにしか生えていないような疎林を好み、すさみ町江須崎のようなよく茂った林では見ることができません。

ツキノワグマ (和歌山県絶滅危惧Ⅰ類、環境省絶滅のおそれのある地域個体群)

胸に白い み かづきもよう 三日月模様があることからこの名前がつけられています。体重は120kgほどになり、本州と四国に せいそく 生息する最大の陸上ほ にゅう 乳類です。この大きな体を維持するために、春から夏にかけてドングリ、カキ、ブナの新芽などをたくさん食べます。また、ハチミツも大好物です。冬の間は、寒さや しょうりょうぶそく 食料不足から身を守るために大木の洞や岩穴で冬眠をします。活動期の体温は約37℃ですが、冬眠中は約34℃まで下がり、呼吸数も毎分30～40回が、3～4回に減ることがあります。この間に平均2頭の子を産みます。

写真は、有田川町 おいし しせつ しいく 生石の施設で飼育されている「太郎」です。太郎の母親と兄弟は越冬中に樹洞内で じゅうどう りょうじゅう 猟銃で撃たれ、太郎だけが生き残り今日まで人間の手で育てられてきました。しかし、人間に育てられた太郎は、二度と山に もと 戻ることにはできません。



ツキノワグマの「太郎」(有田川町) 撮影：細田徹治氏

ヤマネ (和歌山県：準絶滅危惧種；環境省：希少種)

本州、四国、九州に ぶんぷ 分布する1属1種の日本固有種で、国の天然記念物に指定されています。県内では、高野山のほか田辺市以南の たうどうちやう 数カ所で生息が確認されているだけです。頭胴長は約8cm、びちやう 尾長は約5cm、体重は約20gと小さく、ネズミに似ていますが背中の黒毛と尾の長い毛が特徴です。

自然林が主な生息場所ですが、人工林や民家の のきした 軒下にも姿を現すことがあります。夜行性であり、おもに樹上で活動し、果 か 実や昆虫を好んで食べ、冬の間は冬眠します。落ち葉の下の腐



枯れ葉の下から現れたヤマネ (田辺市) 撮影：土永知子氏



アケビを食べるヤマネ (新宮市) 撮影：湊 秋作氏

葉土に浅い穴を掘り、おんだん 温暖な和歌山県では11月から翌年の2月までの4ヶ月間そこで ねむ 眠ります。日本では、平均気温9℃が冬眠開始と終了の目安です。活動期に1分間あたり500～530回であった心拍数や、通常36℃の体温が冬眠中には10分の1程度にまで下がることで、エネルギー消費を最少限にして寒い冬に耐えます。



浮島の森と周辺（新宮市）

【浮島の森】

新宮市の中央部に南北約50m, 東西約90mのほぼ長方形の形をした浮島の森があります。

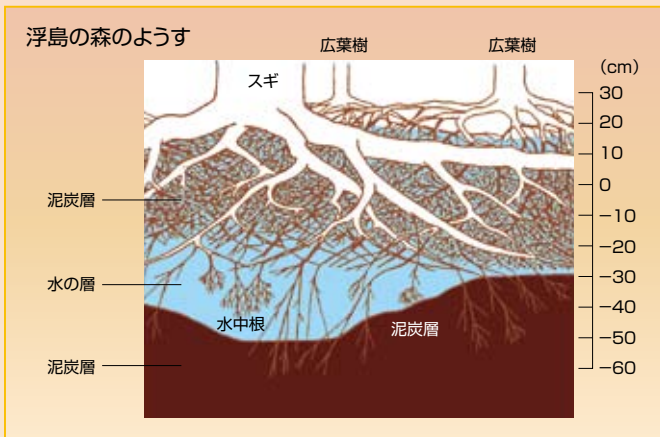
この浮島の森には、ハゼノキ・スギ・ヤマモモなどの高木やツツジ・シダの低木や下草など約160種類の植物が生い茂っています。

昔から、この森が浮島であるといわれたのは、次の理由からでした。

- (1) この島の地表で強く足踏みすると、島がゆれ木々の梢がゆれる。
- (2) 島の周りの水位が昇降すると、島も上下する。
- (3) 強風で島が移動することもある。

この島のでき方は、次のように考えられています。

大昔この土地は、周りの土地よりも低く、水



はけの悪い沼地でした。春から夏にかけ、この沼地にガマ・ミクリなどの水辺の植物が群がって生え、冬にはこれらが、枯れ草となりたい積しました。長い年月の間、こうしたことのくり返しが、沼の中に植物遺体をもととした泥炭という層をつくりました。この泥炭の層は、水よりも軽く、水に浮いたマット状になり、浮島をつくりあげることとなったのです。

その後、浮島には、草の種が風で運ばれ育ち、鳥が木の種子を運び、森ができました。浮島の森の樹木の多くは、図のように根をからみ合わせながら、上の方の泥炭層に根を張り、幹を支えています。とくに、スギの太い根は、浅く広く泥炭層に張り、さらにこの層を貫き、枝分かれした細かい根が、水の層や下の方の泥炭層にまで伸びていると考えられています。

とりわけ、この浮島は、亜熱帯に育つテツホシダと北の寒い地方に生えるヤマドリゼンマイ・オオミズゴケが混生する貴重な植物群落であることから、1927（昭和2）年、国の天然記念物に指定されました。



オオミズゴケ（新宮市）



テツホシダ（新宮市）